



# うそそうそ問答



アパッチ純情













先に突きつけた。日は暮れかかっていた。反応がないので、シユウトは首を傾げ、「あっ」と細かく言い、電球に明かりをつけ、再度突きつけた。

「ここに丸してあるタコダ、これはトシが王子だって言い張ってる国だな。これを見る限りだと、どこの王子になってやろうかと候補を選んでるしか見ようがない。ええ、もう証拠はあがってんだ、往生しやがれてんだ」

トシアキは黙っている。

「もう、ぐうの音も出ないだろう。ん、熱っ、アチチチチ」

トシアキが、シユウトの死角からライターで教科書を炙っていた。シユウトは大慌てで火に包まれ、煙の上がった教科書を投げ捨てた。

畳に転がった教科書を躊躇なく拾い上げたトシアキは窓を開け、裏手のドブ川に投げつけた。インクが燃え特有の薬臭さがする。孤を描き黒い煙を後に従え、ドブに着水し炭の塊となった教科書が流れていく。

脂汗を垂らしたシユウトが呟く。

「なんて強引な」

「見やがれて、なにを見ろって」

「教科書だよ、お前が今放り投げた、ほらっドブ川をどんぶらこどんぶらこと流れているだろうに」

教科書が浮き沈みしながら流れていくのを、シユウトが指差す。

「教科書？ そんなの昔の教科書なんて取って置く筈がな

14  
いだろう。見間違えじゃないのか」

「教科書なんて見間違えるわけないだろう。お前が火をつけておいて、白切るな」

「火？ 火なんてつけてない」

シユウトは焦げた畳を指差す。

「お前が火をつけて、持っていられなくなった俺が捨てた教科書がここに落ちて、畳が焦げたんでしょうが」

シユウトは地団太を踏む。

「いやいや、この焦げは俺が寝煙草しちゃって焦がしたんだ。だから一年前くらいからあったよ」

「いや、ない」

「寝ころがってケータイを弄くっていると、天井の染みが気になる。あれ、こんなところに染みなんてあったかな。雨漏りしてんのかなあ。よくよく見れば人の顔にも見えるなあ。怖っ。嗚呼、なんかぞぞっときた。つてな具合に、この畳もそれと一緒にさ。改めて見ると新鮮に感じるんだ」

トシアキは、どたどたと台所に急ぐシユウトの背に言い、腕を組み頷く。

「馬鹿言ってるんじゃないよ。じゃあこの焦げ臭さは一年前からし続けているのか。もう、なんなんだよ。おい、俺の指が火傷で水ぶくれになっちゃったじゃないか」

声を震わせ、流水で指を冷やすと、火傷で赤くなった箇所が染みる。



シュウトは、もう嘘を追及するのも飽きてきて、一時のあれほど躍起になっていた感情もどこかにいつてしまった。御勝手の曇りガラス越しから街灯が付くのがわかった。暖色系の明かりが菱型に映る。

シュウトの肩に、休日が終わりにむかう特有の鬱蒼とした気持ちに、今日の一連云々の阿呆らしさが重く押し掛かっていた。

トシアキに文句を言う気力も萎え、視線を落としていると、曇りガラスが開く。ガラス戸を開けた側もシュウトも不審そうに顔を見合わせた。

白髪交じりの中年女性は、目が窪み異様な目力があり、シュウトは後ずさった。

化粧っ気がなく眉はない。離れた下がった目蓋、一重の目に、日に焼けた丸顔。

「あのどちら様でしょうか」

シュウトは恐る恐る尋ねるが、中年女性はシュウトの質問には一切答えず、部屋の奥を覗んでいた。

「トシアキなんで電話にでんの」

「母ちゃん」

トシアキは、固まるシュウトの手を引き、曇りガラスを閉める。

「なに、トシアキの母ちゃんなの」

シュウトは狼狽した。初対面の友人の母に対して体裁を気にし、サイドに流した前髪を額に撫で付けた。

<sup>16</sup> 「初め睨んじやったよう、変に思われてないかなあ、あつしっかり挨拶しないと」

玄関から入ってきたトシアキの母に、頬を吊り上げ、犬のような笑顔で会釈を繰り返すシュウトを、トシアキは苦々しく感じた。

「人の話聞いているのか」

方言がきつく、語尾を切るような言い方で、シュウトは聞くのに注意が必要だった。

「あの、僕トシアキの友人の丸シュウトと言います」

恥ずかしそうにトシアキはシュウトを制す。

「挨拶はいいよお。なに急にきてんだよ」

シュウトはおかまいなしに話し続ける。

「生業は左官業をしていますが、それでこのとおり日に焼けておるわけで、決して遊び人ということではありません」

「シュウト余計なことはいいよ。母ちゃんこちらシュウト」

「なんで電話にでんの。留守電は聞いたんかいな」

「まだ聞いてない」

「今日の朝、雨降ってたでしょ。結構な勢いで。昼前には上がったんですがね、これじゃあ現場は水浸しなわけだし、微妙な判断だったんですが結局休みになったんです。いつときますがね不真面目に仕事をボイコットしてここにいるわけじゃないんですよ」

おどけた言い回しをするシュウトが目線に入っていないかのようにトシアキの母は言う。

「予定を前倒しして帰ってきなさいって留守電に入れといたんよ、それなのにまだ何の準備もしてないじゃないの。んもう。そのままでもいいからとにかくこつちを手伝いにきてもらうからよ」

「えっ荷物は」

「いい、いい。後で送って貰えばいいんだだけえ。とりあえずほら、持つもんだけ持って」

トシアキは母に財布と煙草は尻ポケットにねじ込まれ、お気に入りの炭酸ジュースを手を持たされる。

「ビルの入ったひびにですね、こうビーツとテープで枠取りしまして・・・」

身振り手振りを加えシュウトは、己の仕事振りを実演して見せたが、トシアキは母に手を引かれ、シュウトを置き去りにして部屋を出て行く。トシアキの母は居間から出る際に、明かりを消し、シュウトは動きを止めた。

「おい、嘘なんだよなあ。もうこの際、本当だって言うてくれたら、信じるからさあ。なあ。あれついないの」

了